

である。

5) 直腸温 $36^{\circ}\text{C}$ 以上に安定後、環境温の各温に及ぼす影響を見ると、環境温の上昇に伴い各温共に上昇傾向を示すが、直腸・軀幹温の上昇は少く、額温の上昇が最も著しく、末梢温は不安定な上昇を示す。

6) 沐浴の各温に及ぼす影響を環境温、湯温を考慮して検討すると、Ⅲ群では湯温 $43\sim 44^{\circ}\text{C}$ の際が沐浴後の末梢及び額温の下降が最も著しく、直腸軀幹温も数時間後まで下降を続け、第1・第2生日の変動も他の場合に比べ著しい。室温Ⅳ・Ⅴ群では湯温による差は第2生日迄稍見られるが、第3生日以後は著明でない。

#### 47. 新生児胃内容に関する研究(続報)

(賛育会)

木下 正一, 竹岡 秀策, 山梨 順二,  
静谷 晴夫, 吉岡 一之, 尾崎 崇

我々は既に第1報において、胃内容の採取時期、児の成熟の程度、分娩時障害の有無、更には哺乳開始の有無等が新生児胃内容の量、質に何らかの変化を及ぼすことを確認し、主にPHを中心として検討した。又新生児胃内容について、羊水の場合と同様の方法で塗抹乾燥標本を作り、検鏡し、形成した結晶を羊水のそれと比較観察したところ、全く同様の結晶を証明した。よつて、第2報においては、新生児胃内容中のNa, K, Cl等を測定し、羊水、臍帯血液等のそれと比較した。

今回は主として遊離アミノ酸について、2, 3の考察を行つた。新生児の胃内容、殊に未熟児と成熟児の比較検討とともに採取時期による差異についても検討し、これ

らの結果が果して成人と如何に異なるものであろうか、又はどのような経過を経て成人のそれに近づくものであろうかの点についても考察し、2, 3の結果を得たので報告する。

#### 48. 新生児消化管への空気侵入速度と、その診断的応用について

(九州厚生年金)

大谷 善彦, 井上 浩, 竹畠 和夫,  
四方田貞任, 富岡 常泰, 本田 義弘,  
神田 隆弘

児は、子宮内にある間は、消化管は勿論、呼吸器内にも空気はなく、出生後の第一呼吸と共に、之等の管腔内へ空気が浸入するものである。この空気は、時間の経過と共に、下部消化管に達するが、空気の進行速度は、ほぼ一定ではないかと思われ、一定時間後にはほぼ一定の状態が確立されるのではないかと考えられる。このような経過や状態は、単純レ線撮影で容易に追求判定出来るもので、生直後より、種々の時間後に、児の腹部レ線写真撮影を試みた所、各経過時間に応じた、ほぼ一定の所見を得た。

このような検査法及び所見を認知しておくことは、児の消化管通過障害の有無や障害部位の診断上、甚だ有用で、最近経験した6例の消化管障害児では、これと異なつた特有の所見がみられた。上記の生理的腸管像を知つておくことは、消化管通過障害の早期診断上、極めて大切であると共に、児の生理機能を知る上にも興味があり、臨床重要である。

### 第7群 胎児・未熟児・新生児に関する問題(II)

#### 49. 各種薬剤の妊孕現象に及ぼす影響に関する基礎的臨床的研究

(大阪市大)

藤森 速水, 山田 文夫, 澁川 登,  
合田 昭二, 木下 実, 篠崎 輝男,  
吉丸 節治, 渡辺 和夫, 永田 治義,  
東芝 直治

吾が教室に於てはかねてより各種薬剤の妊孕現象に及ぼす影響を検討している故、今日までに得た結果を発表する。(1)抗結核剤としてTB<sub>1</sub>は妊婦に投与する場合1日投与量2mg/kgを越える時は胎児肝に悪影響を及ぼ

す危険のある事を形態学的又SDH活性の面より証明した。SM, PAS, INAH等の高濃度は子宮筋運動性をやや低下せしめ、Oxytocinase活性には影響を及ぼさない事を知つた。DHSM, KMの母児(仔)間移行、またそれら薬剤の妊孕現象、新生児(仔)に及ぼす影響を検討し、臨床的に参考となる結果を得た。これら薬剤の児(仔)聴力に及ぼす影響を検した結果、通常薬用量では母児(仔)に影響のない事を知つた。<sup>14</sup>C-INAHの母仔移行をも検討した。抗結核剤<sup>1314</sup>THについても妊娠ラット或は前期妊娠中毒症例に投与してその影響を検討中である。(2)持続性サルファ剤としてSulfaisomesoleを妊娠ラット或は人工中絶前又は分娩前の妊婦に投与し